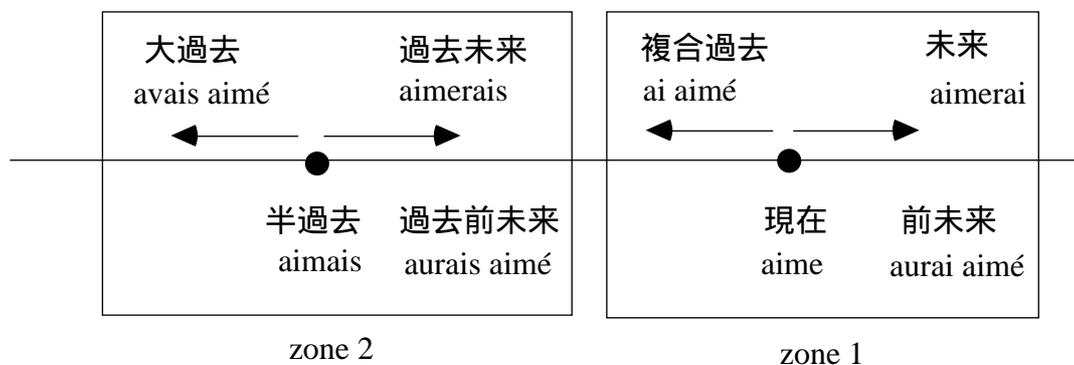


先週は複合過去と半過去の使い分けの問題を取り上げて、これがいかに初心者にとって地雷原であるかということをお話した。話の流れから言うと、地雷を踏まずに通る秘訣を読者は期待しておられるにちがいない。私としてもその秘訣をすぐに教えてさしあげたいのはやまやまなのだが、今週はちょっと回り道をして、フランス語の時制のしくみの全体像を見ることにする。「じらせるんじゃない!!」というお叱りが聞こえてきそう。しかしここはグッと我慢していただきたい。全体像を見通して始めて個々の課題を解決することができる。「急がば回れ」なのである。

時制を支配する二大巨頭：現在と半過去

フランス語の時制は、動詞の語尾活用をもつ単純時制 (ex. j'aime) と、助動詞プラス過去分詞による複合時制 (ex. j'ai aimé) の組み合わせでできていることにはすでにご存じだろう。ずらっと並べて行くと、時制には含まれない不定形や現在分詞に至るまで、単純形と複合形のペアがきれいに整列する。しかしそのような整理の仕方では時制のしくみは理解できない。私は次のようにまとめるのがよいと考えている。例としておなじみの動詞 *aimer* の1人称 *je* の活用を用いた。



zone 1 に含まれるのは、現在形 *aime* と、助動詞が現在の複合過去 *ai aimé*、語尾に *avoir* の現在形を含む未来形 *aimerai*、それと前未来形 *aurais aimé* である。これらの活用形はどこかに「現在」を含んでいる。zone 1 は「現在」を基調とした活用形の集まりなのである。

一方、zone 2 は半過去 *aimais*、助動詞が半過去である大過去 *avais aimé*、語尾に *avoir* の半過去形を含む過去未来 (=条件法現在) *aimerais*、それから過去前未来 (=条件法過去) *aurais aimé* である。これらはどこかに *-ais* という語尾を含んでいる。zone 2 は「半過去」を基調とした活用形の集まりなのである。

zone 1 は「現在」を除いて、*avoir* の現在時制の活用形 *-ai* の支配する世界、zone 2 は *avoir* の半過去の活用形 *-ais* の支配する世界である。何と見事に整然と組織されていることか。私はこの図式を思いついたとき、あまりの美しさに卒倒しそうになっ

た．おまけに zone 1 では，現在 aime だけが -ai に支配されない特権的時制であることまですぐわかるというスグレモノである．

はっきり言おう．フランス語の時制を支配している二大巨頭は「現在」と「半過去」なのだ．それ以外の時制は，「現在」と「半過去」に寄生して暮らしている居候にすぎない．ところが半過去については，「複合過去や単純過去の支えなしには使えない自立性の弱い時制である」と言われることがよくある．そのような見方からすると，半過去の方が居候になるはずだから，「半過去が主人である」とする上の図には異論が出るだろう．これについてはまた後で触れることになる．また上の図には単純過去と前過去が含まれていないが，これについても後で触れる．このふたつは上の図式には入らないで，別の組に属する時制なのである．

「半過去」は過去にずらされた「現在」

上のような図式を立てることで，次のようなことが自然に理解できる．まず，主節が過去のときの，従属節における時制の一致が一目瞭然である．

(1) 現在 半過去

Il a dit : «*J'habite à Rouen.*» 「僕はルーアンに住んでいる」と彼は言った

Il a dit qu'il *habitait* à Rouen.

(2) 複合過去 大過去

Il a dit : «*J'ai oublié de fermer le gaz.*» 「ガス栓を閉めるのを忘れた」と彼は言った

Il a dit qu'il *avait oublié* de fermer le gaz.

(3) 未来 条件法現在

Il a dit : «*J'irai à Paris demain.*» 「明日パリに行く」と彼は言った

Il a dit qu'il *irait* à Paris le lendemain.

(4) 前未来 条件法過去

Il a dit : «*Je serai revenu avant midi.*» 「昼までには戻っている」と彼は言った

Il a dit qu'il *serait revenu* avant midi.

zone 1 を枠線に沿って切り取り，zone 2 に重ねていただきたい．すると重なった下の時制が一致によって変化する時制となる．便利なことこの上ない．實用新案でも申請したいくらいだ．「時制の一致」と呼ばれているのは，現在を中心とする zone 1 から半過去を中心とする zone 2 に足場が移動したときに起きる現象であることがわかる．だから朝倉文法事典にも書かれているが，*J'ai appris que votre fille s'est mariée.* 「お嬢さんが結婚なされたことを聞きました」のように，現在に足場があるときには複合過去から大過去への変化は起きない．

上の図からもうひとつ大事なことがわかる．「半過去は時制の一致を起こさない」ということである．zone 2 に属する半過去を，時制の一致のためにさらに左側に移動させようとしても，zone 2 の左には何も無い．だから，*Ce n'est pas ce que j'espérais.* 「それは私が期待していたことではない」の主節を過去にしても，*Ce n'était pas ce que j'espérais.* 「それは私が期待していたことではなかった」となり，半

過去は半過去のままである。

上の図に含まれていない単純過去と前過去も時制の一致を起こさない。世の文法書には、時制の一致という(1)～(4)のケースしか説明されておらず、半過去・単純過去・前過去については触れられていない。触れない理由まで説明している文法書はまずないが、上の図式を見れば納得できるだろう。

時制の一致という現象を何か機械的な操作だと考えてはいけない。それは言語を単なる「記号操作」だと見なすまちがった言語観に通じる。時制の一致とは、話し手が現在を基調とする zone 1 から半過去を基調とする zone 2 へと引っ越しをして、「視点を移した」ことを意味するのであり、おおげさに言えば「世界の見方を変えた」ことになる。「話している現在」にどっかりと腰を据えてまわりの物事を眺める態度から、「過去のある時点」に腰を据えて物事を眺める態度へとスイッチしているのだ。もちろんタイムマシンがない以上、ほんとうに過去にスリップすることはできない。話し手の頭の中で想像上の移動をしているだけである。

上の図は、「話し手が腰を据えて物事を眺める」ことができるのは、zone 1 の中心である「現在」と zone 2 の中心である「半過去」だけだということを示している。話し手はその他の時制には腰を据えることができない。だから「現在」と「半過去」は時制の二大巨頭なのだ。そして半過去は「過去にずらされた現在」である。今までにもこう言った人はいるのだが、それはいわば比喩としてであり、文字通り受け取った人はいない。しかし私はこれを文字通り受け取るべきだと考えている。そうすれば、時制をめぐる謎のいくつかはたちどころに氷解する。

1組と2組の対立抗争は「視点」のちがい

さて、上の図にはもうひとつ大事なことが隠されている。「zone 1 の時制と zone 2 の時制は、本来同時に使われることがない」という点である。ここでは Quand A, B. 「Aのとき、Bである」という文形式に限って話をする。

zone 1 は「現在に視点を置いた物の見方」を、zone 2 は「過去に視点を置いた物の見方」を表わす。Quand A, B. はその意味からして、出来事 A と出来事 B のあいだに同時に起きたという関係が成り立つことを表わす。zone 1 の立脚する「現在」と、zone 2 の足場となる「過去」とが、同時であるはずがない。だから zone 1 の時制と zone 2 の時制を、混ぜて使うことはできないのである。

実はこう書くにあたって、私は蛮勇をふるうことにした。新明解国語辞典によれば、「蛮勇」とは「考え無しにふるう勇気」「向こう見ずの勇気」とある。なぜ向こう見ずかと言うと、誰でも反例がかんたんに思いつくからである。Je travaillais quand Paul est venu. 「ポールが来たとき私は勉強していた」では、半過去 (zone 2) と複合過去 (zone 1) が混在しているし、Quand je suis arrivé à la gare, le train était déjà parti. 「私が駅に着いたとき、列車はもう出ていた」では複合過去 (zone 1) と大過去 (zone 2) が混在している。どんな教科書にも載っているようなありふれた例文である。こんなにはっきりした反例があるのに、なぜ「zone 1 の時制と zone 2 の時制は

同時に使われることがない」などと主張できるのか。

ここにはフランス語のたどった歴史が関係している。もともと過去の出来事を表わすために使われていた単純過去形が、いつの頃からか上の図式からはみ出してしまい、その隙間を埋めるために、複合過去が zone 1 から zone 2 に進出したのである。複合過去はこうして、現在完了の意味では zone 1 に属し、単純過去の身代わりとしては zone 2 に属するという、二重スパイのような時制になった。この結果として、フランス語の時制組織にはねじれが生まれ、本来のきまりである「zone 1 の時制と zone 2 の時制は同時に使われることがない」ということが見えにくくなったのである。しかし、このきまりは「見えにくくなった」だけで、なくなったわけではない。1組と2組は依然として対立抗争を続けており、近々手打ちが実現する見込みだとは聞いていない。

最後にもうひとつ。zone 2 の時制はすべて「もし仮にこうだったとしたら」という事実と反する仮定で用いられる時制である。Si j'étais à ta place, je dirais «oui». 「もし私が君だったら、うんと言うね」つまり zone 2 は「過去」であるとともに、「反事実」irréel の世界でもあることを、上の図ははっきりと示している。今回は乱暴にあらすじだけを書いたが、次回からはもう少ししていねいに見ることにしよう。

(とうごう ゆうじ)